

看護小規模多機能型居宅介護「サービス評価」 総括表

法人名	医療法人社団恵正会	代表者	二宮正則	法人・事業所の 特徴	本人・家族の思いに寄り添い支援しています。 医療必要度が高い状態になっても、在宅でご本人・ご家族が安心して住み慣れた地域で生活できるよう、医療と介護が連携し柔軟にサービス提供を行います。
事業所名	看護小規模多機能 ホームやすらぎ	管理者	長田美紀		

出席者	市町村職員	知見を有するもの	地域住民・地域団体	利用者	利用者家族	地域包括支援センター	近隣事業所	事業所職員	その他	合計
	人	1人	2人	人	1人	1人	人	2人	人	7人

項目	前回の改善計画	前回の改善計画に対する 取組み・結果	意見	今回の改善計画
A. 事業所自己評価 の確認	<ul style="list-style-type: none"> ①会議開催や業務改善の実施 ②自己評価9項目ごとの計画実施 ③②の進捗を職員間で共有 ④COVID-19 感染症対策の継続 	<ul style="list-style-type: none"> ①業務改善委員会を設置し、職員の意見も反映した業務改善の実施ができた。 ②9項目の改善計画を実施し、情報共有についてはLINE WORKSの導入で情報収集の意識付けができた。自己実現の尊重は、コロナ禍で意向に添えない所もあるが、できるだけ家族とも話をし「～したい」思いを引き出すように努めた。訪問サービスの利用が増え、自宅での生活について把握できる機会が増えた。家族介護力を無理なく活用できるように、急なレスパイトや、定期レスパイトも柔軟に実施した。事業所とご利用者の双方の関りが中心となり、 	<ul style="list-style-type: none"> ② <ul style="list-style-type: none"> ・1日1件でも、参加の喜びがある内容を取り入れる。通いの方も、事業所に行くと楽しいと思っていただける。 ・評価の取組み自体に、前向きに取り組まれていることを評価する。 ・コロナ禍で制限が多い中、自分たちに何ができるのかが話し合われ、課題解決に取り組まれていることがわかった。 ・評価があまり「できていない」が多い項目は業務への影響が気になる。 ・情報一元管理の構築に奮闘されている様子がよくわかる。 ・業務が多忙な様子が伺えるが、問 	<ul style="list-style-type: none"> ①業務改善委員会を毎月開催できる体制を構築する。 ②自己評価9項目ごとの計画実施 ③②の進捗・評価を職員間で共有

		<p>地域活動も自粛傾向にあるため外部とのつながりはほとんどなく、ボランティアの招待もできなかった。運営は2年目となり、職員がご利用者のニーズに柔軟に対応すべく、スタッフ間の思いやり「ありがとう」の発言で雰囲気作りを行った。質の向上については、インシデント・アクシデントレポートは毎朝ミーティングで1週間読み上げ、改善策の周知徹底を行った。知識・技術の研修も計画したが、参集での機会が取れず、紙面や動画利用が多かった。虐待・人権擁護については、職員同士が遠慮なく注意しあえる環境が必要であり、研修やセルフチェックを通して振り返りと意識付けを行った。</p> <p>③朝のミーティング、午後の隙間時間を利用しケアカンファレンスや業務改善会議を実施したが、定期開催まで発展しなかった。</p> <p>④陽性者が判明した時を想定して必要物品を寄せ集めたカートの作成、常に情報収集を行い感染症の動向を把握、年明けの地域感染拡大と感染者の若年化で子供の休校・休園就業困難となった。人員減少時のサービス提供について利用者ごとに内容の優先順位</p>	<p>題点を絞り込み目標必達な計画にし、達成感（表彰制度）を得る方法もひとつかと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・業務の性質上、コンプライアンスやハインリッヒの法則など時々全員で再認識するのも必要かと思う。 ・地域の苦情に対しては、可能な範囲で民生委員とタイアップし協力していきたい。 ・コロナ禍でもあり、計画的に事業が進まないが、その中でも利用者様の満足のために取り組んでおられると思う。 	
--	--	--	---	--

		をつけることを提案。幸い実施には至らなかった。 。		
B. 事業所の しつらえ・環境	地域に開かれた事業所を目標に、玄関の外から入りやすい工夫をしていく。スタッフの対応・言葉使い等の接遇を更に向上していく。	感染症の動向から、面会や入室制限を設ける期間が長期化して、地域の方を招き入れるための工夫の実践ができなかった。また、職員同士の会話や、ご利用者・ご家族への言葉遣い等ご指摘を受けることもあり、次年度計画に引き継ぐ必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> 自由に出入りできるご時世ではないが、とくに工夫がされたようには感じない。 感染症予防対策で、外部の入室が容易ではなく、わからない点もある。 	<p>①事業所の入り口がわかりやすくなるようにご利用者と共同製作でインフォメーションを作成する。</p> <p>②COVID-19 の動向を見ながら、環境整備に配慮し続け、内覧会の開催を計画、実施する。</p>
C. 事業所と地域のかかわり	<p>①地域住民との交流の場を増やせるよう、地域行事への参加、事業所内での行事を実施していく。(コロナウイルス感染症対策をした上で実施)</p> <p>②見まわりネットワークの体制づくりにより地域協働で取り組む。</p>	<p>①地域の活動がコロナ禍で自粛を余儀なくされている。活動が再開できれば、ご利用者とともに参加したいところである。</p> <p>②地域協力体制を組むにあたり、具体的に関与できなかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 地域の春、秋の美化活動に加え、コロナの影響を見て高齢者の見回り活動に協力を得たい。 事業所外に出るとき(送迎等)はすべての職員が名札をつけて、通行人に挨拶ができると開けた感じがする。 	開けた事業所の印象をつくるために、身分証の携行と明るい挨拶の実施からはじめ、行き交う方との会話が増えるように努める。
D. 地域に出向いて 本人の暮らしを支える取組み	地域の行事への参加や散歩など、気分転換ができる時間を積極的に作っていく	地域の行事は今年度も自粛となり、参加することはできなかった。散歩についても、敷地内の花壇を眺めたりが主で、ドライブに出かけたりは1名しかできなかった。外出が自由にできない上にコロナ禍で自粛要請があり未達成である。	<ul style="list-style-type: none"> 利用者の意向(家族)を尊重した支援の取り組み体制が良く分かった。町内会も高齢化(約40%)しており、施設とのかかわりが重要になりつつあると考えている。 	<p>①COVID-19 の動向にもよるが、少人数であっても、ご利用者と地域活動や外出の機会を作っていく。</p> <p>②地域の方々々が気楽に話を聞ける随時相談の受け入れを実施する。</p>
E. 運営推進会議を活かした取組み	<p>①会議を通して地域の要望や意見を伺い、一緒に取り組んでいく。</p> <p>②情報共有の場として、運営推進委員会の時間を大切にしてく。</p>	<p>運営推進会議の開催は参集が2回しかできておらずあとは紙面開催となった。</p> <p>①参集型であれば情報共有や意見交換が活発となり、地域の要望を</p>	<ul style="list-style-type: none"> 運営推進会議を通じて可能な範囲で、やすらぎの雰囲気町内会に紹介していきたい。 	事業所のみならず、地域のお困りごとにも視野を広げ、運営推進会議の場で情報共有と課題解決策の検討を行う。

		<p>聞くこともできたが、紙面開催だと意見や情報提供は少なくなる傾向があった。</p> <p>②事業所にかかわる情報共有だけでなく、地域・近隣の抱える課題なども共有することで地域に存在する事業所としての役割を考える機会となった。</p>		
F. 事業所の 防災・災害対策	<p>①事業所での定期的な防災訓練を計画し、実施する。</p> <p>②事業所の防災計画を見やすい場所に掲示する。</p>	<p>①建物全体としての防災計画については消防署を招いての避難訓練はできなかった。設備点検は実施した。</p> <p>②防災計画の掲示はできなかった。理由としては、BCP策定に向けた見直しが必要であったためである。</p>	<p>・災害発生時を想定した初動体制の検証、消防署主催の出張研修（消火器、担架、避難）等の計画も重要と考えますが、特に高齢者避難要支援の避難方法など難しいと思われる。</p>	<p>令和3年度報酬改定で通達があったように、非常災害時にむけて事業継続計画の作成を始める。経過措置3年（令和6年3月31日まで）</p>

